

今週のメニュー

■ [トピックス](#)

- ◇ホームシアター増加に樹脂窓が活躍
ー住宅エコポイントで弾みにー

■ [随想](#)

- ◇古代ヤマトの遠景（51）ー【中国・朝鮮半島情勢（5）】ー

信越化学工業（株） 木下 清隆

■ [編集後記](#)

■ トピックス

- ◇ホームシアター増加に樹脂窓が活躍
ー住宅エコポイントで弾みにー

ホームシアターとはフリー百科事典ウィキペディアでは、家庭（home）に大画面テレビやマルチチャンネルスピーカーなどを設置し、まるで小型の映画館（theater）であるかのように設備を組むことである、と記載されています（米 home theater、英 home cinema）。

ホームシアターというと、大きな部屋に防音を施し、プロジェクターや音響装置を設置しているように考える方も多いかと思います。しかし、この様な設備を導入するには住宅の改造や、高額な資金が必要です。

しかし、近年この概念が変わってきており、居間でホームシアターを楽しむ方が増えています。大型の薄型テレビが安くなっていることに加え、テレビ放送のデジタル化を間近に控える事や家電エコポイント制度が実施されていることもあり、大型テレビの普及が進んでいることが影響しているようです。また、デジタル化に伴い、テレビの解像度も大きく向上し、HD(ハードディスク)・DVD プレイヤーの普及（更にはテレビの3D化）もこれを後押ししているようです。



大型の薄型テレビとHD・DVDプレイヤーを居間にお持ちの家庭では、映画などを更に臨場感を持って見たいとの思いから、次のステップに、更に良い音質や大音量が出せる音響設備を導入して、本格的ホームシアター化を考えている方も増えています。普通の家の居間をホームシアター化するにあたり、最も問題となるのがどのように遮音するかです。せっかくホームシアターを購入したからには大音量で楽しみたいと思う方も多いはず、しかし日本の住宅は密接している事もあり、音漏れで近所からのクレームを考えると、現状の遮音性能で自信を持てるのはほんのわずかです。

家族が集う場として期待されるだけでなく、映画や音楽の楽しみが広がると家族のコミュニケーションをより豊かにしてくれるホームシアターを樹脂窓とともに計画されてはいいかがでしょうか。もちろん、映画ファンだけでなく、カラオケを楽しむ方々や楽器を演奏される方々にとっても同様のことが言えます。

そこでホームシアターと一緒に樹脂製内窓の設置をする例が増えています。現在、家電エコポイントと同じように、注目を集めている「住宅エコポイント」が適用されるリフォーム用の窓のことです。窓枠、ガラス部が二重になる事もさることながら、窓枠を樹脂製にすることにより一層の遮音性能が期待できます。リフォームといっても大規模なものではなく、一般的な窓であれば現場での施工時間は一窓当たり約30分と手軽なもので、このことがホームシアターの普及に寄与しているようです。



当協会では、樹脂窓の特長をご紹介したパンフレットを作成いたしました。ご参考に、ぜひご覧ください。(了)

[ダウンロードできます](#)

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景（51）－【中国・朝鮮半島情勢（5）】－

信越化学工業（株） 木下 清隆

<百濟>

高句麗の誕生は、前一世紀前後頃と考えられ、それ以降の高句麗は、執拗に玄菟郡・遼東郡との間で攻防を繰り返し、三世紀には魏軍に、四世紀には前燕軍に徹底的に痛めつけられた。このように高句麗の歴史は戦闘に次ぐ戦闘の歴史であったといえる。しかし、高句麗はその軍事力と外交手腕によって半島西北部を制圧し、大きな勢力として君臨するようになる。このような安定が生まれてくると、彼らは自然に半島南部にその目を向けるようになる。



百濟王都の移動

大国高句麗が半島制圧を意図し始めたとき、小国百濟は必然的に国家の統一と体制の強化を強いられることになる。百濟の国家としての誕生は四世紀に入ってからと考えられているが、殆ど間を置かずに彼らは高句麗との戦いを始めている。しかし、その当時、高句麗は建国以来400年以上に亘って大国中国を相手に戦ってきた国である。百濟が高句麗と戦い、たまには勝つことがあるにしても、高句麗の恐ろしさを彼らは肌身で感じたに違いない。その自国の劣勢をカバーするため、彼らは或るときは新羅と手を組み、或るときは倭国に助力を求めた。倭国側もその要請を受け入れざるを得ない事情にあったため、結果的に倭国は半島情勢に巻き込まれて行くことになる。

これまで、倭国の野心から半島侵攻を続けたとする見解が、我国では一般的に流布しているが、倭国がそのような状況にあったのかどうかは検討の余地がある。現実には、高句麗の南下政策に真っ向から立ち向かうことになる半島侵攻など、建国途上にある倭国に出来るはずはなかったと考えられるからである。更に言えば、倭国は中国及び半島情勢の変化を迅速・的確に把握していた。魏が景初二年（238）に帯方郡を討つと、卑弥呼は直ちに

朝貢の使者を遣わしている。その時期は景初三年とされており、これほど迅速に情報入手し、対応していた倭国にしてみれば、四世紀の高句麗の動向など、極めて的確に把握していたと考えるのが当然だからである。

百済の建国とその後の情勢判断を以上のように理解したうえで、もう少し具体的な百済の建国に関わる話を史料から探ってみることにする。なお「百済」を一般には“くだら”と読んでいるが、“ひゃくさい”とも読まれている。韓国語では“ペッチェ”である。

百済の起源に関する伝承には諸説があるが、『三国史記』の「百済本紀」によれば、朱蒙^{しゅもう}の子の温祚^{おんそ}が前十八年に百済を建国したことになる。朱蒙は高句麗の始祖とされている扶余系の人物であることから、百済も扶余系の国ということになる。

次は、古朝鮮王の準が「衛氏朝鮮」を開いた衛満に、その地位を奪われた話を先にしたが、実は、敗れた準は韓に逃れそこで「韓王」になったという話が『後漢書』韓伝に記載されている。準が敗れたのは前 195 年頃とされているところから、当時、「韓」と言う国は存在していたが、「百済」なる国は存在していなかったことになる。

更に高句麗王の子東明が、故国を負われて逃げ出し、その子孫である仇台^{きゅうだい}が帯方の故地に国を建てたとする説を『隋書』百済伝が伝えている。このとき、百家で海を渡ったことから国号を百済(ヒャクサイ)とした、と書かれている。この場合の渡海とは、鴨緑江河口付近から船に乗り現在の韓国海岸にたどり着いたといった意味であろう。この渡海したとされる仇台は、120 年頃活躍した人物とされているので、この時代に百済なる名称が誕生したとの説である。ここに出てくる百済なる国号の誕生譚は当然、後世のこじつけ話と考えられるが、何れにしても、二世紀初頭頃に、百済国の中核となる勢力が誕生したと考えることは出来よう。その後、この勢力が中心となって百済国が生まれたと考えられるが、当然、その時期は更に下ることになる。

その時期をも少し記録から追ってみよう。先に半島の南部は一括して「韓」と呼ばれていたことを紹介したが、『後漢書』および『三国志魏書』では「韓伝」としてまとめられており、「百済」の名は出てこない。次の『晋書』でも「馬韓伝」となっているだけである。晋書で注目されるのは、西晋の武帝に対し、馬韓の諸国王たちがほとんど毎年のように朝貢していることである。時代は三世紀末なので、この当時、馬韓には未だ統一国家が存在していなかったことを示している。『宋書』になって初めて「百済伝」が登場するが、このことは「百済」なる国名が中国に知られるようになったのは、四世紀末から五世紀にかけてということになる。従って、晋書の記述と併せて考えれば、百済の誕生は四世紀中葉となる。

以上のような伝承・記録、その他をまとめて百済建国の経緯を概略すれば以下のようなだろう。

朝鮮半島南部は韓と呼ばれ、馬韓・辰韓・弁韓に分かれていた。この韓地方はその昔は「辰」と呼ばれていたらしいが、それが何故「韓」となったのか、その理由は定かでない。韓の中では馬韓の勢力が強大だったために、馬韓は常に辰王を立てていた。その中心は月支国（目支国とする説もある）にあり、その場所は馬韓の南方とされている。このような状況の中、扶余あるいは高句麗から、かなりの人々が政変その他の理由で馬韓に逃れてき

た。彼らは漢江流域の現在のソウル近辺に落ち着き徐々に勢力を伸ばし、国を建てた。朱蒙伝説を採れば紀元前後の頃、『隋書』百濟伝を採れば二世紀初頭頃と考えられる。その国名を「伯濟」といった可能性はある。『三国志魏書』韓伝には当時存在していた国が五十ヶ国ほど列記されているが、その中に伯濟国があり、この国が中心となって馬韓から百濟が誕生した、との説が一般的だからである。その伯濟国は、馬韓の中で近隣諸国を次々に攻略し、遂には馬韓のほぼ全域を制圧してしまう。その時期が四世紀中葉だったということである。

要するに百濟は馬韓人の中から誕生した統一国家ではなく、扶余系民族による征服国家だったということである。この点では高句麗と同じである。なお、百濟という名称の誕生は定かではないが、伯濟と百濟は類似しており、いつからか百濟と表記されるようになった可能性はあり得よう。

このようにして誕生した百濟は、高句麗の脅威に晒され続けることになるが、371年、機先を制して高句麗の平壤城を攻撃する。ところがこのとき高句麗故国原王が流れ矢に当たって戦死してしまう。この事件が、高句麗の百濟制圧の火に油を注いだ可能性は高い。この後、故国原王の孫にあたる広開土王は、396年、百濟を徹底的に攻め、58もの城を抜き百濟王を捕らえてしまう。「奴客となる」とまで言って跪いた王は命拾いする。この窮地の中から故国の復興を願う百濟王は、太子を人質に差出し、倭国に救援を願い出る。このことが倭国にどれほど大きな問題を投げかけたかは、十分に検討すべきことであるが、従来はほとんど問題にされて来なかったといえよう。従って、この話の続きは、4世紀から5世紀にかけての倭国の歴史の中で更に検討することにする。

広開土王の後を継いだ長寿王は、百濟への攻撃の手を緩めることはなく、475年、王都の漢城（現在のソウル近郊）を陥落させる。これにより百濟は大打撃を受ける。このとき戦死した王に替わって即位した文周王は、約100km南の熊津（現在の公州）に都を移す。半世紀後の538年、今度は聖王が更に都を南西約30kmの泗比（現在の扶余）へ移し、国号を「南扶余」と改めた。百濟は扶余の後裔であるとの主張だといえよう。この聖王は554年、伽耶の勢力と共に新羅を攻めるが、昇竜の勢いにある新羅の前に戦死してしまう。この聖王の死が562年の任那宮家の滅亡につながって行く。

この後、百濟はその劣勢を挽回することは出来ず、660年に新羅・唐連合軍に滅ぼされる。遺臣達の百濟復興の願いに応じた大和朝廷は、数万の兵を派遣するが、663年、白村江において連合軍に大敗北を喫し、復興の願いと半島への倭国の情念は完全に消え去った。百濟はその国家統一から滅亡まで、僅かに300年の歴史しかないが、彼らの歴史は大国高句麗を前にした苦闘の歴史であったといえよう。最後は想定外の展開で滅びてしまうが。結局、大国に飲まれてしまうという自分達の運命を変えることは出来なかった。

（つづく）

前回の「古代ヤマトの遠景」（50）－【中国・朝鮮半島情勢（4）】－は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/292/mag_292.pdf

以前の「古代ヤマトの遠景」は、下記からご覧頂けます。

http://www.vec.gr.jp/mag/list/yamato_list.pdf

■ 編集後記

娘がピアノを習っていてたまに一緒に練習をします。すっかり忘れていて楽譜がすぐに読めません。今にしてみると音楽の世界には不思議だと思ふことがたくさんあります。

音の長さが難しかったり「いろはにほへと」と古風だったり。

- ・ 2分音符・4分音符・8分音符・16分音符

16分音符は4分音符の四分の一の長さで、具体的にどのくらいの長さだ??

そもそも算数が苦手な私は計算が出来ません。

- ・ イ長調、ロ長調、ハ長調とかあるが、なんでイロハなんだろう。

イ短調とかもあり、遠い記憶の中で触れてはいけない世界のような気がする。

- ・ Allegro moderato (アレグロモデラート) 穏やかに速く

穏やかに速く??どのくらいの速さ?

アレグロモデラートで弾きながら、やや弱く (メゾピアノ / mp) とかあると悩みます。

私は芸術の世界には向かないみたいです (リマル)



■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

TEL 03-3297-5601 FAX 03-3297-5783

URL <http://www.vec.gr.jp> E-MAIL info@vec.gr.jp